

2020 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:25~14:25 60分)

1. 解答用紙は、マーク解答用紙のみです。
2. 解答は、必ず解答欄にマークしてください。解答欄以外にマークすると無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. 解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。

THE HISTORY OF THE

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

1789

— 次の問いに答えなさい。

〔問二〕 次の傍線の漢字と同じ漢字を含むものを、左の各群の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。

ア バンジャクの備えをする

A バンユウをふるう

B バンショウを排して決行する

C おショウバンにあずかる

D バンメンにコマを置く

E ヘイバンで面白くない

イ 策をロウする

A ロウホウが舞い込む

B 努力がトロウに終わる

C 年のわりにロウセイしている

D イロウのないようにせよ

E 運命にホンロウされる

ウ そいつはファンパンものだ

A 敵をファンサイする

B ファンエンを上げる

C 不公平な扱いにファンガイする

D 事態がファンキウする

E 連敗にファンキする

エ トタンの苦しみをなめる

A 壁をトソウする

B 真情をトロウする

C カト期を迎える

D 法医学のタイト

E トトウを組む

オ ブッコした友人を追悼する

A 資源がコカツする

B リコ的な態度をとる

C 名前をレンコする

D コグン奮闘する

E セコにたける

〔問二〕 次の漢字の読みを、左の各群の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア 進捗

A しんかん

B しんぼ

C しんちよく

D しんしよく

E しんとう

イ 愁い

A あわい

B わびしい

C つたない

D うれい

E くらい

〔問三〕 次の慣用語の空欄に入れるのにもっとも適当なものを左の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

首を

ア

我を

イ

口を

ウ

A はさむ

B さらす

C ひねる

D とおす

E まく

〔問四〕 次の言葉の意味としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

ア 羹あつものに懲りて膾なますを吹く

イ 蠪螂とうろうの斧おの

ウ ミイラ取りがミイラになる

A 苦労や面倒をいとわず、努力すること

B 力のないものが力量を顧みず強敵に立ち向かうこと

C 形勢を見て、いつでも有利な方につける態勢をとること

D 人を説得しようとした者がかえって相手に説得されること

E 失敗して必要以上に用心深くなること

〔問五〕 次の意味を表すものとしてもっとも適当なものを左の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア ぐっすり寝込んでいて何が起こったかも気づかないこと

イ 詩文に、わざとらしい技巧の跡がなく、自然のまままで美しいこと

A 白河夜船

B 思案投首

C 天真爛漫ちんげん

D 自由闊達かっ

E 天衣無縫

二 次の文章は25年ほど前に発表されたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。

これまでは、コミュニケーションといえば、パーソナルなものがマス（大衆）を対象とするものかのいずれかだと考えることが普通であった。たとえば、ある百科事典の「コミュニケーション」の項目には、次のような説明がある。

「よく用いられるコミュニケーションの分類方式の一つは」パーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーションという分類で、前者は少数の人々のあいだで、通例、直接に接触しながらおこなわれるもの、後者は印刷物や電波などの媒体を通じて、同時あるいは短時間のあいだに多数の相手に同一の内容を伝える間接的なコミュニケーションをさす。コミュニケーションにはこれらの分類にあてはまらない、あるいはその中間に位する各種の形態があり、流言などはその特異なものといえる」

この説明でも、コミュニケーションにはそれ以外の形態のものがあることはみとめているものの、主要な形態には数えていない。同様に、それぞれの形態でのコミュニケーションの手段となるいわゆる「コミュニケーション・メディア」についても、どの形態のコミュニケーションにとつてのメディアとなっているかに着目して、これを「マス・メディア」（新聞・雑誌・ラジオ・テレビなど）と「パーソナル・メディア」（手紙や電話・電報など）に分類する二分法が、ひろく採用されてきたし、送受信される情報についても、これを一般情報と個別情報の二つのカテゴリーに大別することが普通であった。

(1) 近代産業社会は、とりわけ、それが生みだした電気通信（テレコム）産業は、パーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーションのそれぞれに対して、強力な特化型のメディアを提供してくれた。パーソナル・メディアとしての電話と、マス・メディアとしての放送（ラジオ、テレビ）がそれであった。ここで「特化型」といったのは、電話はマス・メディアとしての利用には不向きなメディアであり、放送はパーソナル・メディアとしての利用には不向きなメディアだという意味である。

しかし、いうまでもないことだが、マス・メディア、とりわけ電気通信系のそれを発信者として利用できるのは、例外的な少数者に限られていた。近年では、技術的には、比較的安い費用で放送局を開設することが可能になったといわれるが、電波の使用に関しては制度的にきびしい規制が課せられているので、誰でも自由に放送するわけにはいかない。

(2)、一般大衆（マス）にとつては、ごく最近まで、発信者として利用できるメディアは、事実上パーソナル・メディアに限られていたといえよう。そして、一般大衆が——それ以外の「エリート」にとつても——電話をマス・メディア（ないし後述するグループ・メディア）として利用することは、事実上不可能であった。

ところで人間は、本来集団生活を営んでいる。その意味では、集団、すなわち「グループ」（の諸成員）を対象とするコミュニケーションへのニーズは、ほとんど人類の歴史と共に古かっと思われる。グループの範囲が小さくて固定的である間は、そのためのメディアとしては、広場で大声で話すとか、掲示文を紙に書いて張り出すといった、比較的単純なもので足りただろう。しかし、近代文明のように、人々の交流の範囲や規模が大きくなり、グループへの所属あるいは関与もますます多様になってくるようになると、その種のコミュニケーションへのニーズはさらに大きくなり、それを満たすためのメディアも、より高度で効率的なものが要求されるにいたつたはずである。

しかし、残念なことに、近代産業技術は、これまでのところ、そうしたニーズを満たしてくれるような便利なメディアは、生みだしてこなかった。そういうわけで、機械化の進んだ近代産業社会に生きているとはいいいながら、その中のほとんどのひとびとにとつては、これまでは、不特定多数どころか、一〇〇人とか一〇〇〇人といった比較的限られた数の相手に対してさえ、情報を発信するのは容易なわざではなかった。年賀状や転居通知の印刷のように、あるいは、サークルのニュース・レターやピラ配りのように、印刷所に印刷を依頼したり、自分でガリ版を切ったりして、印刷された文書を郵送するか個別に配付してまわるかするのが、(3) だった。コピー機械の登場は個人による情報発信の地平を大きくひろげるものではあつたけれども、まだまだその費用は高く、使える範囲も限られていた。普通の人々が、自分の意見や作品を不特定多数の人々に広く知らせることは、まず不可能であった。論文や著書を発表するわけにもいかず、新聞や雑誌に投書してみたところで採用される確率はごく低く、

ラジオやテレビにスター、タレントとして出演することなど、夢というほかなかった。

ようやくごく近年になって、コンピューターのパーソナル化とネットワーク化が進展するに伴って、グループを対象とするコミュニケーションのための便利なメディアが、生まれてきたのである。これらの「ニューメディア」を利用すれば、誰でも、特定の（あるいは場合によっては不特定の）多数者とはいえないまでも「中数」者に対して、いっせいに同一のメールをおくったり、自分の意見や作品を発表したりすることができる。その具体的な形が「パソコン通信」であり「インターネット」にはかならない。たとえば、私のポケットの中の、あるいは机の上のコンピューターが、インターネットに連結していれば、私は、自分のコンピューターを通じて、同様にインターネットに連結しているどのコンピューターとも、私の好きな時に交信することができる。発信という点でいえば、一つ一つのコンピューターと別々というよりは、私が指定する範囲の複数のコンピューター（とそしてその複数のユーザーたち）に対して、同じ内容の通信を同時に発信できる。【Ⅰ】受信という点でいえば、私のコンピューターは、その気になれば一日二四時間、ネットワークにつながらばなしにしておくこともでき、電話のように一々受話器をあげなくても、相手からの通信をいつでも受けとることができる。【Ⅱ】送受信できるものは、今のところ通常の文書かあるいはコンピューターのプログラムのような「バイナリー・ファイル」が中心だが、しだいに音声や画像、さらには動画も送れるようになりつつある。【Ⅲ】しかも、通信の速度や容量は年々増加の一途を辿（た）っている。逆にその費用の方は、減少する一方である。【Ⅳ】また、いわゆる情報の処理と通信は、ますます一体化しつつある。【Ⅴ】たとえば、私が何か文章を書こうとして、そのための資料を私のコンピューターのハードディスクから取り出すのも、海の向こうの図書館のデータベースから取り出すのも、手間としてはほとんど変わらなくなっていく。同様に、書き上げた文章を、私の机上のコンピューターにしまうのも、何千キロも離れた同僚（たち）のコンピューター（複数）に送るのも、ほとんど同じ手順でできるようになるのである。

そこで私は、この⁽⁴⁾「グループ・コミュニケーション」を、これまでの「パーソナル・コミュニケーション」と「マス・コミュニケーション」にならぶ、コミュニケーションの第三の主要な形態とみなすことを提唱したい。またそのためのメディアとなるパソコン通信ネットワークやインターネットのようなものは、「グループ・メディア」とよんでみたいのである。一九七〇年代

以降、いわゆる“ニューメディア”の登場が華々しく喧伝されたが、その本質は、ここでいう“グループ・メディア”性にあったのではないだろうか。(5)、ファクシミリであれ、パソコン通信であれ、あるいはインターネットであれ、成功しているニューメディアは、結局のところグループ・メディアの範疇はんちゆうに属するものばかりだったように思われる。そして、この意味

での現代のグループ・メディアの提供の中心的な主体は、産業でいえばコンピューター産業だということができるだろう。

“グループ”ということばを冠する理由は、この新しいコミュニケーションの主体とも対象ともなるのは、事前にある程度特定された（たとえば、会費を払らい、IDをもらってあるネットのメンバーとなるような形で）中程度の規模（“特定中数”）のひとつとの集団だと考えるからである。(6)、誰でも無料でアクセスすることを許しているネットも少なくないのだが、

私としては、グループのメンバーの範囲が事前に特定されている場合の方をより重視したい。なぜなら、後にふれるように、そうすることによって相互の信頼関係にもとづいた情報の“通有”がしやすくなるばかりか、ネット全体やその中の一部のノードの運営費用も自前で負担しやすくなると考えるからである。また、グループ内部でのコミュニケーションを前提として、さらにその境界をこえたグループ間のコミュニケーションが発展していくといった(7)も持ちやすいと思われるからである。

さらに、ここでいう“グループ”の範囲は、その時々に変化してもさしつかえない。たとえば、ある個人あるいはグループが、それぞれ違った人々——一部に重複があることは、もちろん差支えないが——をそのメンバーとしてふくむ、複数の“メンバー・リスト”をもっていて、どれかのリストを対象として、ある特定のメッセージを同報発信するといったケースがそれである。また、より極端な場合には、私は、自分のメッセージの内容を、不特定多数のあらゆる相手に公開することができる。すなわち、放送のような形でそれを発信することもできれば、それをファイルにして私のコンピューターの中のある特定の場所においておいて、誰でもそれを取りにきてもよいようにしておくこともできる。逆の極端な場合には、受信の資格がある人がある特定の相手に限定することもできる。すなわち、その人に直接送りつけることもできれば、通信自体は暗号化した上で万人に発信しておいて、特定の鍵を持っている人だけがその内容を解読できるようにすることも、やがては、できるようになるだろう。（ちなみに、この後者の方式が実用化すれば、誰がいつ誰に対して何を発信したかを特定することは、事実上不可能になり、コ

コミュニケーションのプライバシーはほぼ完璧に保たれることになるだろう。

そうだとすれば、ここでいう「グループ」の両方の極端には、「マス」と「パーソナル」がいるというイメージをもつことができる。そして、「グループ」にすべての人がふくまれる場合には、グループ・コミュニケーションは事実上マス・コミュニケーションになり、他方「グループ」にある特定の一人しかふくまれない場合には、グループ・コミュニケーションは事実上パーソナル・コミュニケーションになってしまうだろう。そして、充分柔軟な「グループ・メディア」であれば、それは同時に、「マス・メディア」としても「パーソナル・メディア」としても充分利用に耐えるような、一種の「万能メディア」として機能することになるだろう。いいかえれば、強力でしかも安価なグループ・メディアの発達によって、既存のパーソナル・メディアやマス・メディアが、代替・吸収されていってしまう可能性が考えられるようになったのである。それが、今日一部で言われている「電話やテレビの終わり」ということの、また「通信と放送の融合」ということの、実質的な意味なのである。そうした展開は、既存のメディアの発展の延長線上に生ずることではない。ここで述べたような意味でのコミュニケーション・メディアの「パラダイム・チェンジ」の結果として、新しいタイプのメディア(8)(グループ・メディア)が生まれ、それが他のタイプのメディア(電話や放送)を呑みこんでしまう形で生ずるのである。

ただし、いうまでもないが、そのことは、パーソナル・コミュニケーションやマス・コミュニケーションのニーズそのものがなくなることを意味するものではなくない。それらのニーズを満たすために、特化したメディアを利用する必要がなくなるといふことにすぎない。

(公文俊平『情報文明論』による)

* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 傍線(1)「近代産業社会」とあるが、この社会における「メディア」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 近代産業社会は、いままでは不可能であった集団を対象とするコミュニケーションが可能になるマス・メディアを生み出した。

B 近代産業社会は、一般大衆が多数を占める社会であるが、電話以外に個人が情報を送受信できるメディアを生み出せなかった。

C 近代産業社会は、特定の権利を持った者が、同時に多数の相手に同一の内容を間接的に伝達するラジオ・テレビを生み出した。

D 近代産業社会は、産業革命を経てさまざまなことを可能にしたが、一般大衆が情報を発信できるメディアは生み出せなかった。

E 近代産業社会は、電話というパーソナル・メディアよりも、機能的であるラジオ・テレビというマス・メディアを生み出した。

〔問二〕 空欄(2)(5)(6)に入れるのもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

A (2) むしろ (5) 要するに (6) たしかに

B (2) したがって (5) 事実 (6) もちろん

C (2) むしろ (5) だから (6) もちろん

D (2) したがって (5) 要するに (6) ただし

E (2) あるいは (5) そして (6) たしかに

〔問三〕 空欄(3)(7)に入れるのもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-----|-------|-----|----------|
| A | (3) | おんのじ | (7) | シチュエーション |
| B | (3) | せきのやま | (7) | ビジョン |
| C | (3) | うかぶせ | (7) | シチュエーション |
| D | (3) | おんのじ | (7) | ビジョン |
| E | (3) | うかぶせ | (7) | オピニオン |

〔問四〕 次の一文を挿入する箇所としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

いわゆる「マルチメディア」の通信が可能になるうとしているのである。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-------|---|------|---|-----|
| A | 【I】 | B | 【II】 | C | 【III】 | D | 【IV】 | E | 【V】 |
|---|-----|---|------|---|-------|---|------|---|-----|

〔問五〕 傍線(4)「グループ・コミュニケーション」とあるが、「コンピュータ」による「グループ・コミュニケーション」の説明として適当ではないものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 前もって登録したものだけではなく、誰でも主体になることができ、また無償でアクセスを許すこともできる。
- B 今までよりも早く、しかも大量に文書だけでなく、音声や画像、さらには動画などを送受信することができる。
- C 特定の、あるいは不特定の相手からのメールを、受信者が直接に受信しなくても、一日中受信することができる。
- D 特定の、あるいは不特定の中等度の規模の人たちに、いつせいに同一内容のメールを送ったりすることができる。
- E 文書を送るだけでなく、文書を書くために必要な情報はどのようなものであれ世界中から集めることができる。

〔問六〕 傍線(8)「新しいタイプのメディア」とあるが、どのような点が新しいのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 電話やラジオ・テレビという既存のメディアの延長上にあるのではなく、それを駆逐した上で君臨しているメディアである点。

B 不特定多数に向けて情報を発信しても、コミュニケーションのプライバシーを完全に保護することができるメディアである点。

C 従来のような強力な特化型のメディアではなく、「マス」にも「パーソナル」にもしなやかに対応ができるメディアである点。

D 電話やラジオ・テレビなどよりも安く利用することができるために、これらの必要性がなくなり、唯一残るメディアである点。

E 不特定多数に向けて情報を発信できないが、集団のメンバーを固定することなく変化させることができるメディアである点。

〔問七〕 本文における「コミュニケーション」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A コンピューターの出現により、コミュニケーションの主体や対象が集団になり、その範囲も柔軟に変化するようになってきた。
- B パーソナル・コミュニケーションからマス・コミュニケーションに、さらにグループ・コミュニケーションに移行しつつある。
- C 一般大衆は今までは情報の発信者になることができなかったが、コンピューターの出現により、送受信もできるようになった。
- D インターネットが利用されるようになって、電話は使い続けられるが、テレビ・ラジオは役割を終え、いずれは消滅していく。
- E コンピューターによって不特定多数に情報を発信できるようになったが、プライバシーの保護にはいまだ問題点が残っている。

〔問八〕 本文の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 近代文明に入り、人びとの交流の範囲が格段に広がったので、それに対応した便利なメディアを近代産業技術は生み出した。

B 活版印刷術も画期的だったが、それ以上にコピー機械は優れており、人々は文書を不特定多数に容易に配布できるようになった。

C いままでは特定の権利を持った者だけが電波を利用することができたのだが、いまは誰もがテレビ放送ができるようになった。

D 人間は、従来からグループ・コミュニケーションを行っているが、昔と今では使用しているメディアが大きく異なっている。

E コミュニケーションはパーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーションの二つしかないと考えられている。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

その起源においてあらゆる音楽は、深く宗教儀式と結びついてきた。対するに今日の私たちは、ふだん音楽を聴くとき、別に神様のことを考えたりなんかしない。近代以後の社会において音楽は、宗教から切り離され、「娯楽」だということにされてきた。しかしそれでもなお、AKBやエグザイルに熱狂するファンを思い浮かべればわかるよう、音楽経験の根底にはかつての祈りや奉納儀式や集団的熱狂の記憶が残っている。その気はなくとも私たちは無意識のうちに、宗教的啓示を求めて音楽を聴いている。これもまた、音楽を取り巻く状況がどれだけ変わろうとも、人間が人間である限り決して変わらないだろうことがらの一つだ。音楽は一種の宗教的共同体（いまどきの表現を使えば「絆^{きずな}」）を作る力を持ち続けているのであり、さらに言うなら、新しい音楽は新しい人間の共同体のありようを啓示してくれているのかもしれないのである。

今日では芸術は「感性」に、そして科学は「理性」に属するものというのが半ば常識になっていて、両者は互いに相容れない人間の精神活動の領域と考えられているふしがある。「芸術は感性なんだから、理屈なんか考えずに、自由に想像力をはばかせればいいんだ」とか、あるいは逆に、「科学は感性じゃなくて理性なんだから、実証できないものを科学に持ち込むのは客観的じゃない」とかいった決まり文句を口にするとき、人はこの「感性≠理性」の二分法にはまりこんでいる。しかし本来に「感性≡主観的≡証明できない」VS「理性≡客観的≡証明できる」なのか？ 両者は水と油のように相容れず、理性と感性の中間にオーバーラップ領域はなく、そして両者を足せばこの世の中になると信じるなんて、あまりに単細胞すぎる。

古くから芸術は深く科学的認識と結びついていて、そもそも科学性なくしては**大傑作**など生まれようがないということは、たとえばダ・ヴィンチなどを考えればすぐにわかるだろう。「最後の晩餐^{ばんさん}」の構図は、芸術だの感性だのという以前に、まずは科学的空間認識だ。三次元の奥行があつて、座標軸的でシンメトリックかつ均質で、すべてが中心点からの遠近によって階層化され、統合された空間。これこそデカルトやニュートンが思い描いたのと同じ世界像ではなかったか。世界の新しい見え方を数式や図の代わりに絵にすると、あのようになるのであつて、それは単なる「きれいな絵」などではなく、新しい世界観の設計図な

のである。こんな例はいくらでも挙げる事ができるし、ハートと感性だけで芸術創作を試みるなど、物理学的知識もなしに建築設計をしようとするに等しい。そんな建物はあつという間に瓦解してしまふだろう。

同じく近代科学もまた、少なくともガリレオとかニュートンとかアインシュタイン並のブレイクスルーは、単なる「発見」というより、啓示とか幻視とかに近いものだったのだと私は信じる。彼らにはきつと、ある瞬間に突如として、まったく別の法則で世界が動いているのが視えたのだ。ダ・ヴィンチのように絵を描く代わりに、彼らは数式を記した。しかし彼らにはきつと数式化する以前にもう、画家の心の中に特定の「像」が浮かぶのと同じようにして、まったく新しい「世界の像」が視えていた。それは蟻のごとくコツコツと実証を積み上げていけば自動的に至るようなものではなく、預言者が雷に打たれたように別世界を視るのにも似た経験だったはずだ。

偉大な芸術家について、ある瞬間に突如としてそれまで聴いたこともないような響きが聞こえてきたとか、次の作品が眼前にまざまざと視えたといったエピソードが語られる。同じようにアインシュタインはあるとき、自分が光の速さで光を追いかける夢を見て、これが相対性理論の出発点になったと言われる。これは芸術家における靈感の一瞬ときわめて近い経験であつたと想像される。

芸術は科学であり、科学は芸術である。芸術は人が思っているほど気ままでファンタスティックなものではない。科学を欠いたハートだけの芸術は主観的なわごとの類に終始するほかない。同じように、感性と幻視を欠いた科学はただのテクノロジーであり、それは日々の生活の利便性を向上させてくれはするだろうが、世界観のブレイクスルーには至るまい。

天才科学者にはガリベンの勤労の美德より天才芸術家の幻視がお似合いだ。「この」世界の中でいくら「 $1+1=2$ 」式の労働を積み上げて、「こちら側」の世界の中で牛歩の歩み続けるばかりで、「別の」世界への道は開けない。別世界を視るためには亀裂と跳躍が必要だ。しかし「こちら側」の世界の中にいて、その中で「客観性」を不滅の真理のように信じ込んでいる人から見ると、別世界を視るとは狂気であり幻視であり、科学の芸術化と見えるやもしれない妄想である。

「別の世界を視る／見せる」という意味で、芸術と科学はかつての魔術師や預言者や錬金術師たちの双子の末裔である。周知

のようにあらゆる芸術は古来、今では「科学」と称されているものとともに、神権や王権と深く結びついた「魔術」であった。たとえばピラミッドの美しい幾何学形や、巨大な尖塔をもつ教会や、そこで鳴り響く不思議なオルガンの音は、神の王国の奇跡を民衆に見せるための魔法であり、その演出には感性のみならず、ありとあらゆる同時代の科学的知識が総動員された。

統治手段としての魔術は、古くから権力（神や王）と深く結びついており、そもそも魔術もとい芸術／科学をもたなかった古代文明など皆無だろう。とりわけ音楽は芸術の中で最も情動的な芸術として、あらゆる神権統治にとって不可欠であって、図像を禁じる宗教はまれにあるにせよ、音楽（歌）を禁じた宗教というものを、私は知らない。

(3) 近代市民社会は、魔界に通じる危うい存在としての芸術／科学を、一生懸命脱魔術化してきたと言えるだろう。まだアインシュタインくらいまでは魔法使いの弟子的なオーラをまもっていたと思われる科学者たちだが、今の科学にはもはや不透明な魔術性はみじんも残っていない。「もはや魔術ではない」と自己証明することこそ、近代科学の発展の最大の(4) だったのかもしれない。それは「社会をよりよくしていく」という国家プロジェクトに奉仕する立派なツールでなくてはならず、そこには誰もが平等にアクセスできて、原理的には誰もが理解可能で、誰がやっても同じ結果になるという透明性を担保することが、その(5) である。科学においてすら、本当の「客観性」などというものがはたして在るのかどうか、きわめて疑問であるにもかかわらず、である。

科学を脱魔術化するためのツールが「コレハモハヤ魔術デハナイ」という「客観性」という名の呪文だったとすれば、芸術から魔術性を剝奪するためのキーワードは「娯楽性」である。(6) 人は、たとえば美術館やコンサートホールで一時的に別世界に遊んだとしても、それはあくまで日々の労働のための気晴らし——リクリエーションとは要するに労働意欲の「再充填」のことだ——以上のものであってはならず、そのままあちらの世界へワープしたりすることなく、いったん会場の外に出ればすぐに我に返らねばならない。

それは「マジックショー」であって、本物のマジックになってはいけない。「コレハ魔術デハナク奇術娯楽ダ」という呪文もまた、客観化の一種だ。奇術ならば——科学と同じように——「客観的な」タネと仕掛けがあるわけだし、少なくとも原理的

には誰でもそれにアクセスしマスターすることができるし、練習さえすれば誰がやっても同じ結果になるはずなのだから。

(7) 「教養としての芸術」といった発想も、この「娯楽としての芸術」の一変種であって、芸術を「お勉強」の対象とすることでもって、その魔術性を奪い人畜無害化する方策の一つだったと言える。

しからば「魔術を手なずける近代のプロジェクト」ははたして成功したかと問えば、もちろん答えは否である。二〇世紀の科学はこの世界を一瞬で滅ぼす原爆の呪文を見出した。そして二一世紀においては、地上のほとんどの人間を不要のものとするようなAIという名の傀儡かいらいの開発に、日々科学者たちは邁進まいしんしている。そして同じく二〇世紀において音楽や映画は、単なる娯楽のフリをしながら、世界中の人々を洗脳し続け、ときに戦争へ向かって駆り立ててきた。芸術は世界観の刷り込みである。数多のハリウッド映画やポップスは、ほとんど世界規模の洗脳装置だと言いたくなるほどだ。かつてとまったく変わることなく、⁽⁸⁾ 芸術も科学も魔術であり続けているのである。

(岡田暁生『音楽と出会う——21世紀的つきあい方』による)

* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 傍線(1)「大傑作」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 大傑作というものは、主観的な世界像ではなく、みんなの心を揺さぶる新しい世界像が提示されていなければならない。

B 大傑作を創作するには、感性を用いるだけでなく、理性的な認識に基づき作品がイメージされていなければならない。

C 大傑作というものは、現実的な世界に縛られることなく、この世に存在しない美的な世界を構築しなければならない。

D 大傑作を創作するには、科学と芸術を別世界と捉えるのではなく、ひとつの世界ととらえ、創作しなければならない。

E 大傑作というものは、理性と感性を備えた人間の力だけでは創作できず、神の啓示を受けたうえで創作しなければならない。

〔問二〕 傍線(2)「別世界を視る」とあるが、これを視るためにはどのようなにしなければならないのか。その説明としてもっとも

適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 別世界を視るためには、数式に基づいて仮説の証明を行うのではなく、絵画的なイメージで真理を認識しなければならない。

B 別世界を視るためには、努力をして獲得した後天的な能力を用いるだけでなく、先験的な天賦の才能がなければならない。

C 別世界を視るためには、地道に経験的事実だけを根拠にして研究をつづけるのではなく、超越的な飛躍がなければならない。

D 別世界を視るためには、生活に役立つ功利性などを考えるのではなく、論理的で芸術的な理論を構築しなければならない。

E 別世界を視るためには、科学的な発想にとどまっているのではなく、神仏に深く帰依する敬虔な態度がなければならない。

〔問三〕 空欄(3)(6)(7)に入れるのにもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|-----|------|-----|-----|-----|------|
| A | (3) | しかるに | (6) | つまり | (7) | ちなみに |
| B | (3) | むしろ | (6) | または | (7) | さらに |
| C | (3) | ところが | (6) | つまり | (7) | さらに |
| D | (3) | しかるに | (6) | しかも | (7) | ちなみに |
| E | (3) | むしろ | (6) | しかも | (7) | もちろん |

〔問四〕 空欄(4)(5)に入れるのにもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-----|---------|-----|------|
| A | (4) | コンセプト | (5) | 大義名分 |
| B | (4) | イデオロギー | (5) | 専権事項 |
| C | (4) | モチベーション | (5) | 至上命題 |
| D | (4) | ロジック | (5) | 存在証明 |
| E | (4) | プロセス | (5) | 先決問題 |

〔問五〕 傍線(8)「芸術も科学も魔術であり続けている」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 近代教育を通じて、芸術も科学も教養として身につけることを要求され、それにより人間を洗脳し続けているという。

B 昔は神権や王権と結びついていた芸術と科学だが、いまでは市民の管理の下、人間に影響を与え続けているという。

C 芸術を娯楽化し、科学を客観化することによって、芸術と科学は、いまでも新しい世界像を描き続けているという。

D 近代市民社会の思いとは裏腹に、芸術や科学はいまでも人間の生に影響を与え、支配しようとし続けているという。

E 二一世紀においては、芸術と科学に誰もがアクセスできるようになったため、世界規模で広まり続けているという。

〔問六〕 本文の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 世界観をブレイクスルーするためには、天才科学者たちの論理的な思考力と偉大な芸術家たちの感性が必要である。

B 芸術と科学は時代により目的とすることが変わるが、その時々々の権力者と結びつき、自らの存在価値を維持している。

C 二〇世紀に入ってから科学は原爆を作るなど、いままではなく人間に悪影響を与えるようなものに変ってしまった。

D ハリウッド映画やポップスは人々に気晴らしを与えることで労働意欲を増すなど、未曾有の魔術として機能している。

E 近代になって音楽を取り巻く環境がいくら変わっても、音楽は単なる娯楽ではなく人間に影響を与えるものである。





0000

0000